

# 旧藩における護国神社の創建

群馬県邑楽護国神社の事例から

今井昭彦

Establishment of Shrines for the War Dead in the Former Feudal Clans: The Example of the Oura Gokoku Shrine in Gunma Prefecture

## はじめに

- ①館林藩の出兵と招魂祠の創建
- ②招魂祠の移転と護国神社への発展
- ③敗戦後の展開と戦死者祭祀の現状むすび

## 【論文概要】

本稿は筆者の「近代日本における戦死者祭祀の問題」に関する、一連の研究の一部である。全国各地に散在する護国神社は、靖国神社の末社として位置づけられているが、護国神社についての研究は殆どなされていないのが現状である。したがってここでは一つの事例として、幕末維新期に上州館林藩(新政府軍)が建立した招魂祠を起源とする、群馬県邑楽護国神社(現館林市)の創建過程を辿ることによって、「地方の靖国」たる同社の果した機能や役割について、再検討を試みたものである。

幕末維新の上州館林藩は、いわゆる官軍として戊辰の内戦に出兵し、同藩兵は東北地方まで転戦して三九名の戦死者を出す。戊辰戦役後の明治二年九月、同藩主秋元礼朝はこの藩兵三九名を祀るために館林の地に招魂祠を建立する。しかし廢藩置県とともに招魂祠は存続の危機に直面するが、明治八年四月には一転して官祭館林招魂社と改称し、存続の危機から脱することになり、西南戦役後の明治十四年には現在地(市街地)に移転する。

西南戦役後、日本は内戦から対外戦争の時代に入り、新たな戦死者が生み出されることになる。これにともない靖国神社は別格官幣社となって対外戦争の戦死者を専らその祭神としていくことになるが、同招魂社も大正十三年に至り日清・日露戦役の戦死者を合祀することになる。ここで旧藩兵以外の対外戦争戦死者が祀られ、「地方の靖国」として位置づけられる。昭和期に入つて日支事変等の戦死者も祀られて、昭和十四年四月には邑楽護国神社と改称し、さらにアジア太平洋戦争の戦死者を合祀することでその役割は確立していく。

敗戦後は昭和四十三年四月の百年祭をピークに、その機能は低下していくが、同時に各地に埋葬されている旧藩兵三九名の祭祀も、衰退の一途を辿っているのが現状であり、戦死者の無縫化の問題も深刻化することになる。